

弘教寺



今、未来を見つめて、

—二法要の意義—

弘教寺住職 中山英昭

十二月五日、いよいよ弘教寺開山百五十周年記念法要、宗祖七百五十回大遠忌お待ち受け法要の二法要をお勤めすることになった。

第15・16号の「つつじ寺だより」に書かせていただいたが、弘教寺の歴代住職、坊守、その他多くの門信徒の愛山護法の心が、引き継がれ、百五十年の歴史を刻むことができた。弘教寺に関わり、支えてくれた多くの方々のご貢献、ご尽力に、感涙の思いを深くする。今、本山も地方寺院も近い将来かかえるであろう危機に苦慮している。

一つは、過疎化、高齢化、少子化が、地方寺院を疲弊(ひへい)させ、全国のかなりの寺院が、兼任寺院となるか、廃寺となるであろう。大変な時代がやってくるのである。

本山のかかえる危機とは何かといえば、本山の存続そのものである。周知の如く、本山は、地方寺院の、冥加金、賦課金等により維持(いじ)・運営されている。地方寺院の危機は、本山の危機と言って良いのである。地方寺院は、(過疎地の寺院は無理かも知



第17号

発行所

T370-0131
伊勢崎市境米岡二七九-二
浄土真宗本願寺派弘教寺
寺報編集部
電話0270(七四)0573

れないが)、都市部、農村部共に、所属する門信徒によつて、少なからず支えてもらえる。

しかし、本山そのものは、上納される冥加金等によつて維持・運営されている訳であるから、多くの地方寺院が、将来消滅する中で、持ちこたえられないことも十分考えられる。

十月末に、新門(ご門主のご子息)さまが来県され、弘教寺を含む三ヶ寺を視察された。住職・坊守方との懇談では、群馬の現状を真剣に聞き取られていた。新門さまがやがて継職された後にやってくる厳しい状況を、象徴しているものとも受け取れた。

もう一つは、寺院(宗教)離れが、より顕著になるということである。都市部で見られる、直葬、家族葬は、やがて、地方においても、主流となってくることは、確実である。法事等が減少してきている現状をみると、将来予測されることである。

戦後六十五年、物の豊かさの追求の結果、豊かであるべき社会が、決して豊かでない状況を産み出したのも、今日の日本の姿ではなからうか。

ここ数日、桐生市で、小学生の女の子が自死したことが、新聞、テレビ等で取り上げられている。学校での同級生によるいじめが、

原因であるらしい。本当につらい事件である。子ども社会は、大人社会の縮図とも言える。近年、テレビのテロップに、都心の鉄道の人身事故が、たびたび流れる。社会全体も弱者をいたわる思いが欠けているように思われる。ここ十数年、三万人以上の自死者を、日本の社会は、産み出しているのだから。高度の経済成長を望めない今日、方向を改め、心豊かに、お互いのいのちを尊重し、大切にしていくなき方を考えても良いのではなからうか。

かつての真宗門徒は、「仏法を聞く」、「お念仏のみ教えを聞く」ことを一番にし、生きてきた。念仏者の真骨頂である。

弘教寺の二法要を通じて、私達の先祖が時には命をかけて守り、受け継いできた「念仏」という宝を、今一度見直す大切な機会であると思うのである。また、この度の宗祖の大遠忌法要をご縁として、お念仏のふるさと、法の城である本山(本願寺)を守っていくことは、私達門信徒の責務であることを、再認識していきたいものである。



御影堂の親鸞聖人御影

十二月五日は弘教寺の二法要に皆さんぜひご参拝いただきたいと思うことです。

合掌

弘教寺仏壯・仏婦合同研修旅行記

十月二十六日・二十七日に参加者四十三名で秋の房総グルメ旅、楽しい親睦会に行つてきました。マザー牧場での可愛い羊のショーを見学後に鋸南町へ、海と山の美しい地に在る最誓寺に到着しました。最誓寺は弘教寺住職のお姉様が嫁いでいる寺。お勤めをした後、住職様から江戸初期に由来するお寺の成り立ちを伺いました。昼食は六年前に新築された素晴らしい会館で、息子さんが経営する「花あかり」特製の松花堂弁当は見栄えも良く、味も最高でした。皆様の心温まるご接待を受け、心もお腹も満たされました。



本堂の前で最誓寺の皆様と一緒に記念撮影



「花あかり」特製の松花堂弁当

夕食は網元の宿「ろくや」での新鮮な地魚を使った舟盛りの味は格別で、次から次ぎへとの魚料理を堪能しました。※

※一日目の昼食は水郷佐原(山田屋)で評判の鰻をいただきました。食後に小江戸を思わせる町並みを散策、伊能忠敬記念館では五十歳を過ぎからの歩測による日本地図の精密さに感心させられました。皆さんと一緒に美しい景色と美味しい料理、思い出に残るグルメ旅に参加させていただき、有難うございました。(清水み)



佐原山田屋の鰻重

親鸞聖人七五〇回大遠忌 女性集い

十月八日築地別院にて、親鸞聖人七五〇回大遠忌お持ち受け法要『東京教区女性集い』が開催され、弘教寺から十二名が参加をしました。

今回の開催は女性が主体となり開催されるものであって、参加するそれぞれの立場から共に学び、共に楽しむ場として、関係の創出を願うものでした。従って日程は刻みに女性に関する内容が多い様でした。心・頭・体と、フル回転し、有意義な集いの中に、とても忙しく感じました。先ずは映画上映会「ブタがいた教室」では子ブタの飼育に生徒全員が輪、丸くなったたりへこんだり、苦勞から愛情に変わり、命の大切さ、尊さに責任を持つて解決していくか、生徒達の真剣な話し合い



ダーナショップでの参拝者の皆さん

に感動し、涙が溢れてきました。それから山崎紹耕(しようこ)先生の講演「スライド「ハニービスケットの作り方」・山崎紹耕先生と釈徹宗先生の食を中心にした対談です。三度の食生活によって自分を見直すことが出来る。食を中心に分かたが各寺が出店したダーナショップです。「女性集い」の試みです。各寺毎に個性、特技を活かして作りあげた素晴らしい手作り品です。弘教寺もブローチと来年の干支のうさぎのマスコットを出店し、他寺に負けじ劣らず、皆様の協力もあり完売いたしました。ダーナ募金として納める事ができ安堵しています。

参加した十二名も有意義な一日を過ごすことができました。

(野水た)



手作り品：ブローチ



長寿の源「囲碁の会」だより

研鑽に励げまれる皆さん



本多さん



後列 左より柴崎さん 玉田さん
前列 左より橋本さん 前田さん



寺報14号でも紹介した通り、平成二十年二月に発足したこの「囲碁の会」は、毎月一回の対局で、すでに二十七回を数えています。(途中半年間の休会があり)
現在は五名の会員で、日頃の研鑽(けんさん)の成果を競いあっています。橋本治太郎さんは、昭和三十一年に日本棋院の初段を得しその後二段、三段と進みその時の認可※

※状は、立派な和紙に毛筆で書かれ、棋院理事長、名人の署名が並んで桐の箱に入っています(写真左上)。私達は各自の棋力に応じ

橋本さんに何目か置碁で挑みます。

囲碁の歴史は古く、四千年前に中国で生まれ、日本に伝来したのは、推古朝(七世紀)

で正倉院御物の中に碁盤が存在しています。織田信長は日海上人に五目置いて一回も勝てず「ああ名人かな」といったと伝わっています。秀吉は兵家の作戦に役立つ道具として自らも研鑽に励みました。信長、秀吉、家康の棋力はほぼ同レベルで日海上人に五子局(五目のハンディ)であったと云われています。女性の棋士も多く、NHKの大河ドラマ「篤姫」でおなじみですが、現在も多くの女性棋士が第一線で活躍しています。
大変面白いゲームです、私達の「囲碁の会」にも初心者や女性の参加者、希望者をお待ちしています。(玉田 た)

千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要参拝

浄土真宗本願寺派の「全戦没者追悼法要」が国立・千鳥ヶ淵戦没者墓苑でお勤めがあり、参拝をさせていただきました。毎年九月十八日のこの法要は、今年が三十回目になり【ご門主様・新門様・お裏方様・新裏方様】がご臨席され、各国の大使、衆参の国会議員の参拝に加え、全国からの参拝の門信徒により盛大、且つ厳粛に修行されました。



今回は法要前に、元国連事務次長の明石康氏の「核兵器の全滅・対話信頼・共生に基づく平和」などについて日本の役割は大切であ

るとの講演がありました。

また、親鸞聖人七五〇回大遠忌法要に向けての記念事業である「安穩灯火リレー」の分灯式が行われ、全教区を巡回する灯火リレーが北コースと南コース分かれて、全国に向けて出発しました。

阿弥陀仏のみ教をいただく身として思い出に残る参拝となりました。

※千鳥ヶ淵墓苑には本年五月時点で三十五万八千余柱が安置されております(橋本 ま)

弘教寺ゴルフ会・群真会ゴルフ

待ちに待った第十二回弘教寺ゴルフコンペが十月十二日に桐生カントリーで行われました。好天に恵まれた絶好のゴルフ日和でした。

ゴルフ場に向かう車中で「今回は是非、泉さんに優勝して欲しい」。との声があがり、皆が願っていたと思います。参加者は二十名で最後まで激戦のプレーとなりました。



喜びの泉さん

グリーンが本当にきれいな中に、白球が飛んでいくのがよく見えた。成績の発表は、寺でパーティを兼ねて行われ、泉さんが皆の願いも叶って初優勝された。皆から拍手が送られ本当に優勝できて良かったという祝の席となりました。また、群真会ゴルフコンペも九月二十八日に行われ、十位内に六名が入賞する好成績でした。これからも皆健康に留意して楽しいゴルフをやっていきましょう。(神戸 ゆ)

東京教区仏教壮年会連盟

「結成三十周年記念大会」開催される

十月十七日 本願寺築地別院本堂にて教区仏壯連盟結成三十周年記念大会が、新門さまのご臨席のもと盛大に開催されました。

当日は教区内の各組から総勢三百三名参加、弘教寺はご住職以下十名参加致しました。

本大会は、「これからの生き方を考えるー朋友の輪を拓けようー」をテーマとして、献灯・献花から始まり、設立以来三十年以上経過した単位仏壮会の表彰や、新たに結成された単位会が紹介され、また「教区仏壯連盟三十年のあゆみ」と題してスライドが放映され、その中では、弘教寺の仏教壮年会の活動も紹介されました。



午後、本願寺派勸学の北畠典生師が「浄土真宗のみ教えに生きよう」と題し、お念仏の日暮らしをさせて頂く中にこそ、豊かな人生を送ることが出来るという内容の記念講演が行なわれました。

大会終了後の懇親会では、総勢二百二十名参加、和気あいあいとお互いに情報交換等を行い楽しいひと時を過ごしました。

(頁塚 しゅん)

仏教が生んだ日常語

仏教の豆知識(9)

【言語道断】(「こんごうだん」)

「言語道断だ」などといえは「もつてのほかだ」「とんでもないことだ」「あきれてものがいえぬ」などと、大変手厳しく批判する言葉として、一般には使われています。

言語道断という日常語は悪い意味にとられることが多いようです。しかし、この言語道断という言葉は、もともと仏教語で、「言語で説明する道の絶えた」ということです。「悟りの境地や真理の世界は、言葉や文字では、とても表すことのできないほど奥深いものである」という意味なのです。

「言語同断」と書かれているものも見受けられますが、いずれにしても、言葉では表現しえない深い真理を指しています。

深い真理を意味している言葉が転化して、悪い意味の言葉になるのですから、同じ言葉でも変われば変わるものですね。

【我慢】(がまん)

「我慢」も現在は「絶え忍ぶ」「辛抱する」の意味に使われておりますが、もとは仏教語です。「我」は自分に執着することを意味し、「慢」は慢心を表すことで、もともとの仏教語は「自分の能力・力を過信しうぬぼれる」ことの意味であります。漢字はその時代、その時代での影響で変化していく不思議な言葉のようです。

(吉田・釋願船)

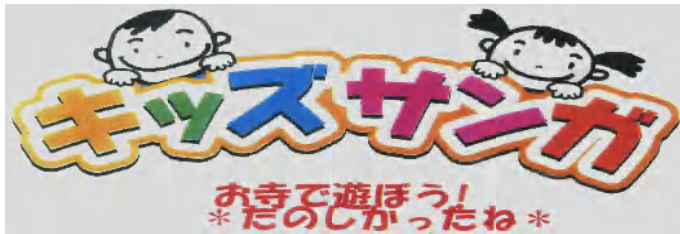
◆ 行事予定 ◆ (平成22年12月~平成23年3月)

月別	弘教寺の行事予定		教区・群馬組の行事予定	
12月	5日	開山百五十周年記念法要 宗祖お待ち受け法要	11日	教区仏壯理事会 第6期連研(2) 於敬西寺
	17日・19日	婦人会例会・壮年会例会		
	23日	子供の集い		
1月	1日	元旦会	9日~16日	本山 御正忌報恩講
	18日	婦人会例会		
	23日	寺役員会・新年会		
2月			5日	第6期連研(3) 於清光寺
	12日	子供の集い	7日	組ビハーラ若宮苑涅槃会
	18日	婦人会例会	13日	教区仏壯結成記念日研修
3月	27日	壮年会例会		
	18日~24日	春彼岸	1日	教区仏婦1日研修
			5日	教区仏壯理事会
	25日	婦人会例会		

※ 編集後記 ※

今年の夏は、気象庁が統計を取り始めてからの百十三年間で一番の猛暑でした。冷房のない北海道の友人は経験のない暑さにひたすら耐えたそう。更に秋の農作物も不作になったとのこと。百十三年の観測は未だ初歩で自然現象の把握は無理のようだが、異常気象の実態は捉えているようです。将来の子孫の生活を守る為、出来ることは何かと考えさせられます。

(橋本ま)



特 集 号

子どものつどい

弘 教 寺

弘教寺での「子どものつどい」も、今年で十六年目を迎えます。寺の本堂で、念仏の声や合掌する子どもの姿を見聞きすることは久しくありませんでした。坊守が中心となり、仏壮・仏婦の二十人を超えるスタッフの理解と協力のおかげで、今では年六回の例会を持つことができるようになりました。

本山では、親鸞聖人七百五十回大遠忌法要の事業の一貫として、全寺院でのキッズサンガ(子どものつどい)を結成させるという事業目標を持っています。遅々とした動きのようではありますが、本願寺の広報紙等を見る限り、その動きは全国規模で出てきているようです。

次代の寺を支えてくれる子ども達が、喜々として寺にやってくる姿を見るとき、「子どものつどい」をやってきて良かったという思いが、こみ上げてきます。同時に、これまで支えて下さった多くのスタッフの皆さんに心より感謝を申し上げます。

また、今後ともどうぞ宜しく。

(住職)

寺は、大人ばかりでなく子供たちも気楽に集い、仏様や仏法に出会う場として足を運ぶるところです。

そういう場を実現したのが、子どものつどいです。子どもたちが寺に集い、住職のお話や楽しい遊びのなかで仏法に触れ、寺に親しみを持てるようにと始められました。

平成七年に始まり、年一回夏休みの開催を昨年からは年六回の開催に増やしました。毎回のおつとめでは、「なもあみだぶつ」「アミダさま」「おしゃかさま」「命」などの住職のお話や大型紙芝居で仏法に触れ、お寺クイズなどで寺について知ってもらうようにしてきました。



夏の子どものつどいは、今年で通算十六回となり、境内を広場にしていろいろな遊びで賑わいます。春のつどいが始まってからは、子どもたちに自分の手で作り出すことのおもしろさと喜びを知らせたいと考え、「作って遊ぼう」と「作って食べよう」の二つのテーマで行っています。手作りの遊びをしなくなった子どもたちと、手作りの遊びしかなかった昔の子どもたち、つまり、祖父母世代の仏壮・仏婦のスタッフの皆さんとが、遊びや食べることを通してやりとりしています。年六回となった今、より多く手作りの遊びの経験や寺での世代を超えた交流ができるようになりました。

さらに、スタッフの方々は、自分の得意分野を生かして協力してくれています。ご門徒さんの一人が、夏ごとに手作りして上演してきた大型紙芝居は、十作にもなりました。お釈迦様のお話などの仏教説話で、仏法を分かりやすく楽しく子どもたちに伝える大切な手段の一つです。また、「お寺クイズ」を作るのも、遊び内容を考え作り出すことも、おやつ作りの手助けも、皆それぞれお得意のところでも主体的に協力をいただいています。有形無形の寺の財産として、スタッフの力があって、子どものつどいの支えとなっています。このように、多くの方々の力をいただいている場ができ、子どもたちが仏様に手を合わせてくれることに感謝し、これからは、皆が共に親しみを持って集える寺であり続けたいと思います。

南無阿弥陀仏

(坊守)

お寺であそぼう!



なもあみだぶつ



らいはいのうた



住職のお話し

手作り紙芝居 「かしこいオウム」



田中鐵郎作、坊守の読み手です
王様のご馳走として料理される
オウムたちの運命は?

「夏のつどい」



輪投げに挑戦ソレー



左・右とそこだ!

(屋外ゲーム)



ぬる?捕まえたぞ!



いくつ捕れた?

紙てっぽう



構えてどこまで飛ぶ

びっくりシャボン玉



人間シャボン玉



百点ゲットするぞ

光るどろだんご



最高位のマリンブル

作って食べよう・遊ぼう



風吹けと走り出す



丸めての白玉だんご

紙ひこうき



かざぐるま



カンぽっくり



昔を思いの餅つき